

ル、答

二、沼田教授休職畑助教授不日轉任ノ答ニ付工藝部ニ課スル塑造及木彫并ニ師範科ニ課スル塑造及木彫ハ水谷教授担当セラ
ル、コト、ナル

彫刻科ではその後もさらに教育法改革の検討が続けられた。

② 白井雨山辞職

大正九年十一月二十二日、彫刻科教授白井雨山が辞職した。雨山は元治元年三月一日、伊予国東宇和郡鬼ヶ窪村に生まれ、南予中学退学後、松尾馬城に文人画を、彰義堂で西洋画を、渡辺省亭に容齋派の画を、望月玉泉に四條派を習うなどして明治二十二年、二十六歳で東京美術学校に入学し、彫刻を学び、同二十六年、第一回卒業生となった。同年、石川県工業学校彫刻科教員となり、同三十年には本校雇に、次いで同三十一年には彫刻科助教となり、大村西崖とともに塑造部設置に尽力し、同三十四年、彫刻家としては初めての国費留学生としてパリに赴いた。同三十七年帰国して直ちに本校教授に昇格し、塑造教育に尽くして多くの俊秀を送り出すとともに文展その他の審査員を歴任し、また、幾多の記念銅像原型制作に携わった。

雨山の辞職は、当時の諸新聞などの報道によれば、後進に道を開くためと、特に前年（大正八年）の帝國美術院会員選出の際、選に入らず、彫刻界に対する蟠りが高じたためと考えられるが、さらにもう一つ、文人画家の境界に耽溺したいという気持の高まりにも原

因があったようである。前述のように、雨山は若い頃文人画を習い、師とともに各地を遊歴した経験があったが、大正期には再び文人画を描き、あるいは盛んに漢詩を作るようになり、友人の大村西崖と又玄画社を作って文人画の復興を唱導するに至る。彼らの心底には当時の画家たちがこぞって技巧の末に墮し、塗抹を事としてゐるのを慨嘆し、これを警醒しようという気持があったという（『雨山先生遺作集』序文、正木直彦）。なお、大正六年以降漢詩仲間となった芹沢閑は雨山が彼に「自分は學校の彫刻科を出で、今其科の教官たること多年なるが、彫塑のことは原來氣に染まず、近來益々嫌になりたり。何卒して老後は詩と畫とを以て樂まんと思ふ」と述懐したことを伝えている（『東京美術學校校友會月報』第二十八卷第三号）。

雨山の辞任に際して彫刻科は大正九年十一月二十八日に講堂で送別式を行なった（54頁記事参照）。

③ 建畠大夢の教授就任

大正九年二月十八日、建畠大夢（本名弥一郎）が彫刻科教授（塑造実習担任）に就任した。これは大正五年の美術學校改革運動の際に論点の一つとなっていた彫刻科刷新の第一着手であった。

建畠は明治十三年二月二十九日和歌山県有田郡城山村大字境川に生まれ、同四十年三月京都市美術工芸學校を卒業、九月に本校彫刻科（選科第二年級）に入学し、同四十四年三月に卒業した。在校中第二回文展に「閑静」を出品して三等賞を受けて以来毎年受賞し、大正八年帝展開設に際して審査委員に選ばれた。

建畠は京都市美術工芸學校在校中から秀才の誉れが高かった。石

川確治（明治三十八年卒）は東京美術学校彫刻研究科在学中の頃、彼と相知ったが、「建畠大夢氏」（『中央美術』第三卷第十二号。大正六年十二月）の中で次のように述べている。

建畠君の性質は氏の製作にも現はれて居る通り至極温厚篤實の好人物である。一體藝術家と云ふものはとかく粗暴に流れ易いものであるが、氏は決してそんなことのないごく圓滿の人である。建畠君の秀才であることは學校時代から文展に製作を出して常に優賞をとつて居られたのに徴しても知れる。その當時美術學校には秀才優待の意味から正規の年限は五ケ年でも秀才と認めれば一年或は二年も一足飛びにあげられる規則があつたが、その規則を彫刻科に於て最初に適用されたのは建畠君であつた。そして同氏はたしか皆より一年早く學校を出られたと思つて居る。建畠君の學校へ入學した當時建畠君に就いて評判の面白い話があつた。それは當時の彫塑科の主任教授の白井兩山氏がよく學生の居る處に來られると、此度建畠と云ふ大變上手な人が來たからぐづ／＼して居ると追ひ越されてしまふぞと云はれたことである。皆はどんな上手な人かと思つて見に行くところ程上手なので感心した。その白井先生の言葉通り建畠君はぐん／＼他を追ひ越して年々優秀な作品を見せてくれるのは誠に喜ばしく思ふところである。

このように建畠は秀才にして温厚篤実、よく子供を題材にして快い作品を作り、金儲けが拙く（前掲書）、俳句を趣味とするような人だった。『東京美術學校校友会月報』にも時々その俳句が載つて

いる。なお、彼はかつて北村西望とともに、白井兩山の家の離れを借りて自炊生活をしながら美術學校へ通つたという（苦闘の人横江君「建畠大夢『中央美術』第十四卷第一号。昭和三年一月」）。教授時代については建畠寛造が『建畠大夢』（昭和十八年）の中に次のように記している。

大正九年二月、東京美術學校教授になつた。そして木彫部の生徒らが、むかし乍らの板彫のお手本に興味なく嫌らぬものあるを見て、モデルを使はさなければいけないなど、後に來るものらの爲めに教授上の革新を叫んだ。また塑造部の生徒の習作に對つて『よくモデルを見よ』『こんな足で歩けるか』と、無遠慮に指導した。「」この簡單にして、しかも含蓄ある言葉は、よく物の要點を衝いてをり、生徒間に敬慕されて、教授中で一番人氣があり、萬年青鉢のニックネームを奉られた。

④ 日本画科生徒の要求

大正九年四月末五月初の「諸新聞切抜」（本學附屬圖書館藏）を見ると、日本画科一年生による教育法改革要求に関する記事が散見する。外に記録資料が現存しないため、詳細な経緯は不明であるが、生徒の活動の一端を窺うに足る出來事なので、上記の新聞記事を抜粋しておく。

東京美術學校生徒の試験撤廢運動

日本畫科が先づ鋒火を擧げて五箇條の要求を提出した